

珈琲の思い出二

和樹が酔っ払って電話してきたことがある。会社の飲み会の帰りがけだった。

「優子、今からコーヒーを飲みに行こう」と言う。風呂上がりの髪を乾かしていた私は、慌てて身支度を整えて、待ち合わせの場所へと走った。

だが、深夜、どこのカフェも閉店していて、BARはあつても、満足できるコーヒーを出すような店はなかった。

「和樹さん、うちに来る？おいしいコーヒー淹れてあげるよ。」

「うん、行こう行こう。」

泥酔している彼からは、ビールや焼酎、ワインなど様々なアルコールの入り混じった匂いがした。

「色々ね、飲んでただけどね、うん、途中でね、優子のことを思い出してたのさ、そしたら、急にコーヒーが飲みたくなったのさ。」呂律が回っていない。

「で、優子と一緒にコーヒー飲むぞ、と思ったらね、もう課長の話なんかどうでもいいやつて思えて、『課長、お話中失礼しますが、コーヒーを飲むので帰ります』って言って、出てきちゃった。」

その後のことは定かではないが、とにかく家に来て、湯を沸かし、コーヒーをドリップしている間に和樹が後ろから抱きついてきた。

「うーん、優子、いい匂い」そう言って、私の服を脱がせようとする。

結局、SEXしながら、コーヒーをひと口飲んで、

「ああ、いいね」を繰り返して、そのまま本当に良くなってしまったのだろう、彼は最後のコーヒーを飲み干すと、私の中で果てた。